

参考図書紹介

「庭で飼うはじめてのみつばち」 和田依子 編著, 中村純 監修. (2008) 山と溪谷社. 126 pp. ISBN978-4-635-45008-9. 定価 1,800 円 (税別)



Web サイト「養蜂レポート」を主宰する著者が本学中村純の監修で製作した、副題通りの「ホビー養蜂入門」。ミツバチに関心のあるすべての人に、ミツバチの飼育から生産物を得る楽しさまでを伝える。一方で、ミツバチを飼うにあたっての注意点にも言及。興味レベルや状況からミツバチとのつきあい方を探す「みつばち相性診断チャート」も掲載。飼う以外の楽しみへの誘いという部分も強調している。

「とろーりあまい! はちみつ」ものづくり絵本シリーズ どうやってできるの? 2 小野正人監修. (2007) チャイルド本社. 30 pp. ISBN978-4-8054-2956-3. 定価 850 円



かわいらしいイラストで、ミツバチの世界と

養蜂を解説した、子ども向けの本にしては文字情報もしっかり多い絵本。「小さなみつばちたちが、大家族で協力しあってつくる“はちみつ”のヒミツを、子どもたちに向けてやさしく語りかけてくれます」との監修者の解説通り、ハチミツ大好きな子どもへの読み聞かせに好適。

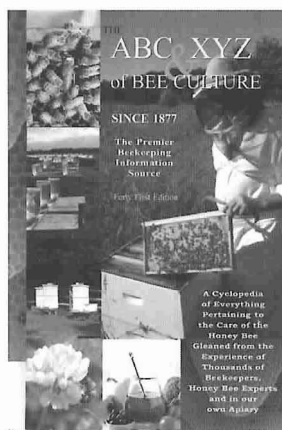


「新版特用畜産ハンドブック」新版特用畜産ハンドブック編集委員会 (編). (2007). 畜産技術協会. 360 pp. 定価 3,500 円
ウシ、ブタ、ニワトリを除く家畜、家禽、ペット、実験動物、毛皮動物、ペット用小鳥な

ど合計 35 種類以上の特用家畜を採りあげ、その産業規模、主要品種、飼育技術、生産物の用途などについて記述。最終章の第 21 章 (pp. 336-360) では本学中村純が「ミツバチ」を解説。

「The ABC & XYZ of Bee Culture」The 41st Edition. Shimanuki, H., Flottum, K. and A. Harman (Eds). (2007) The A. I. Root Company. 911 pp. ISBN-13: 978-0-936028-22-4.

広く養蜂全般をカバーする百科事典として、第 1 版ははるか 130 年前に出版されている伝統ある名著の最新版。アルファベット順の用語解説を中心とした構成はそのままに、この第 41 版では、



旧版に較べて大量の最新情報が追加されて内容が量的かつ質的に増強され、さらにカラー写真を多用するなど全体の体裁も一新された。世界各国の養蜂事情の項では、本学吉田忠晴が日本の養蜂を紹介。

「Bee」Animal Series. Preston, C. (2006) Reaktion Books. 206 pp. ISBN-10: 1-86189-256X.



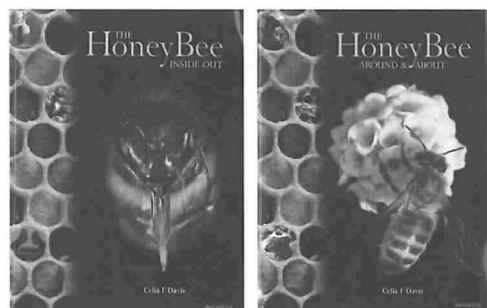
「"una apis, nulla apis (ミツバチ 1 匹ではミツバチではない)" のだから、この本のタイトルはそもそもつけ間違っている…」で始まるこの書籍は、ミツバチの文化誌を広く、歴史から、芸術や政治の世界でのミツバチの扱われ方、さらに少々俗っぽい情報まで、実に広く丹念に集め、それぞれにウィットに富んだ解説が付く。本文は英語だが、小版ながら図版が多く、かなり珍しいものも掲載されていて、ミツバチに興味があるすべての人にお勧めの一冊である。

参考図書紹介

「The Honey Bee Inside Out」 Davis, C. F. (2004)
Bee Craft. 150 pp. ISBN 0-900147-07-5.

「The Honey Bee Around & About」 Davis, C. F. (2007)
Bee Craft. 158 pp. ISBN-13: 978-0-900147-08-1.

イギリスの養蜂雑誌 Bee Craft に、長年にわたって連載されていた、ミツバチの生物学講座の再録第1集と第2集。イギリス養蜂家協会の養蜂研修コースの学習参考書を想定し、これから養蜂を目指す人のレベルに合わせて、あまり専門的にならないよう、しかし充実した内容、分量で解説してある。第1集は、外部/内部構造、発生、発育、分業、繁殖、巣の環境の調節、第2集は、ミツバチの起源、進化、



種類、疾病や害敵、資源、生産物などを項目として含み、この2冊でミツバチと養蜂に関する十分な知識が得られる。ミツバチや養蜂に関する英語の用語、用例を学ぶのにも向いている。

..... 蜂群崩壊症候群関連書籍

「ハチはなぜ大量死したのか」 ローワン・ジェイコブセン 著・中里京子 訳. (2009) 文藝春秋. 339 pp. 定価 1,905 円 (税別) ISBN978-4-16-371030-3.

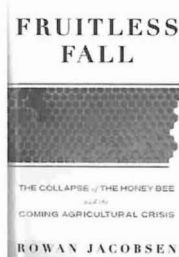


原著「Fruitless Fall」(右)の翻訳版。青山大学の福岡伸一教授の解説付き。訳文は妥当かつ専門用語もよく拾われていて、わかりやすく、その点は好感が持てる。

邦文タイトルは明らかに「煽り」すぎて、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」に呼応した原題の直訳「実りなき秋」でもよかったと思えるほど(売れるかどうかの問題はあるが)、この種の本の中では内容的には行儀はよい。ただ、原題の副題にある将来の農業危機に関してはやや考察不足で、その代わりに、どうして途中でそんなに寄り道をしたのかと思うほどにミツバチに関する記述としての枝葉が多い。

本書は、ミツバチ不足問題の取材記者の情報源になり、またこれをきっかけに改めてミツバチに興味を持った人が多かったこともあって、その果たした役割は大きかったと評価できる。

翻訳版の最大の失態は、「ミツバチの頭部の拡大図」として表紙に大きく掲載した蜂がミツバチではなかったこと。この点、実に惜しい。



「Fruitless Fall, The Collapse of the Honeybee and the coming Agricultural Crisis」(「ハチはなぜ大量死したか」の原著) Jacobsen, R. (2008) Bloomsbury. 279 pp. ISBN-10 1-59691-537-4.

「A World without Bees」 Benjamin, A. and B. McCullum. (2008) Guardian Books. 298 pp. ISBN: 978-0-85265-092-9.



「A Spring without Bees, How Colony Collapse Disorder has Endangered our Food Supply」 Schacker, M. (2008) Lyons Press. 292 pp. ISBN 978-1-59921-432-0.

「Honey Bees, Colony Collapse Disorder and Pollinator Role in Ecosystems」 Blaylock, I. T. and T. H. Richards (eds.) (2009) Nova Science. 282 pp. ISBN: 978-1-60692-688-8.

